

なお、「韓国仏教」とか「朝鮮仏教」という表記の問題があるが、いずれの言葉も日本において現在使用されており、基本的には各執筆者の意向を尊重した。ただ、韓国では「韓国仏教」と表すので、曹先生と私が関係する分野では佐藤先生に許可を得ながら「韓国仏教」の語を使用した。

それから、各担当分野毎に一応参考目録を付しているが、さらに全体目録も作成した。これは執筆者6人でカバーしきれなかった分野について、せめて論文題目・掲載誌名だけでも提示して少しでも有益なものにしたいと願ったためである。近年発達の著しいインターネットを利用して情報を検索したり、或いは様々な目録類を調査したり、さらに図書館の書棚で偶然見つかったものも大事に記録した。そして私の友人である金竜泰氏と鄭有植氏が一件一件直接論文にあたって確認作業を行い、さらに佐藤先生に日本語順(アイウエオ順)にして整理をお願いしたものである。

この目録は、論文集八号に提供する予定であたっが、それぞれの雑誌や書物に関する簡単な説明や、それから韓国にいる研究者が日本の文献をお読みになる際に有益な情報などを追加して、この特集の韓国語版に紹介したい。

今回の特集企画は、約一年半の時間をかけ、執筆者をはじめ、会長、副会長、そして2人の友人の多大な努力によって生まれた成果である。内容として未だ不十分な面もあると思われるが、些かでも韓国仏教の研究者に貢献できることを願っている。

2000年7月

金 天鶴

韓国仏教通史の主な研究

石井修道

日本の世界第二次戦争の敗戦によって、日本は1945年8月、ポツダム宣言を受諾した。朝鮮半島は38度線で南北に分断され、北朝鮮はソ連軍、南朝鮮はアメリカ軍が進駐し、不幸な状態は今日まで及んでいる。韓国の人達にとっても朝鮮半島の統一は悲願であり、南北対話の新しい動きがはじまり21世紀を迎えようとする今日、その実現の一日でも早いことを一人の日本人として望んでいる。

ところが、韓国に最も近いところに住んでいる日本の我々が、この朝鮮半島の歴史と文化に対して知っていることは極めて少なく、仏教史についても近年の研究は決して多くはない。日本に留学している仏教の研究者が集い、韓国留学生印度学仏教学研究会を結成し、互いに研究成果を発表する場を持っている。その主な成果報告として『韓国仏教学SEMINAR』6(1995)を発行し、既に第7号(1998)を出版している。その研究会の会長に駒澤大学大学院博士課程の朴点淑(一黙)氏が、副会長に金鍾旭(圓忠)氏が就任した。今年度は駒澤大学が当番というのである。私が金氏の学部の卒業論文を指導した因縁もあり、是非とも柳田聖山先生に「巻頭言」を依頼して欲しいとのことであり、また、今回発行の研究会の論文集に執筆して欲しいと依頼され、その特集号の発行の相談に乗って欲しいとたのまれた。前者の件はすんなりと事が運び、驚くほどの早さで柳田先生より「巻頭言」を頂戴することができた。後者については、選ばれた内容は、日本語で書かれた韓国仏教に関する研究の著書や論文を紹介し、その研究史をまとめるということになった。

考えてみれば、筆者は金氏の卒論指導をした縁はあるものの韓国仏教の研究は全く成果を残してはいないし、その任にないことは明確であった。

また、既刊の『韓国仏教学SEMINAR』を見ても、禅宗の研究はほとんど無く、最も多いのは華嚴学関係と言えよう。

しかし、更に考えてみるならば、駒澤大学は朝鮮仏教史の研究に関して大きな関わりがある。後述するように、忽滑谷快天の[1930]『朝鮮禅教史』(春秋社)はこの分野の古典であり、江田俊雄には[1936]『朝鮮の仏教』(『緑人』4)の簡潔な通史があり、[1958]『朝鮮の仏教』(『講座仏教 IV』所収、大蔵出版社)も同様の成果であり、この時代の朝鮮仏教史の代表的な研究者であることが知られる。江田の成果がまとめられて、[1977]『朝鮮仏教史の研究』(国書刊行会)として刊行されたことをみると、駒澤大学における朝鮮仏教史の研究の流れが脈々と流れていることに気付く。日本の大学の中で先駆けて仏教学部に「朝鮮仏教史」の講座が開設されて10年ほど過ぎたが、最初の担当者は鎌田茂雄氏であり、鎌田氏はその分野で知らない者はいない中国・朝鮮仏教史の現在における権威者である。鎌田氏の[1987]『朝鮮仏教史』(東京大学出版会)は、現在入手可能な唯一と呼べる日本人が書いた入門の概説書である。鎌田氏が駒澤大学で始めた均如研究が日本の朝鮮仏教史の研究に果たした影響は計り知れないものがあり、目下、吉津宜英氏を中心となって継承しているが、その成果報告も本書の中に多く見出すであろう。鎌田氏が担当した講座は、現在では石井公成氏が担当して継続している。また、鄭性本(茂煥)氏は駒澤大学に提出した博士論文の『中国禅宗の成立史研究』が民族社からハングル語で出版され、ひきつづき『新羅禅宗の研究』(民族社)も出版し、韓国において大活躍中である。もちろん禅宗関係以外で駒澤大学の博士号の学位を取得した人も鄭氏の外にも多く数えることができる。これらから判断するならば、いま一度駒澤大学に朝鮮の禅宗に関しても研究の復活を訴える必要がある。そんな役目をはたすのが、筆者のつとめであると覚悟して、筆者も一から学び始めた成果をここに報告する次第である。

ところで、最初に朝鮮半島は現在不幸な状況に置かれていることを述べた。それは最も大事な国名の表現においても難しい問題を感じる。韓国の人に聞くと、朝鮮とは南北に分離されている現時点では、朝鮮(1392~1896)の約500年のみを頭に浮かべるとのことである。また、地理的には南北全体

の半島を朝鮮半島と言わずに韓半島と呼ぶとのことである。日本では、新聞、ラジオ、テレビを始め、出版物を含めて、朝鮮半島と呼ぶのに慣れ親しんでいる。その朝鮮半島に展開された仏教史に対して我々は朝鮮仏教史と呼び、その違和感は筆者においても全くない。しかし、韓国の人の中にはなじめないものを感じる人が多いことも理解できるのである。20年前に初めてパスポートを所持したときの感激と共に「This passport is valid for all countries and areas except North Korea (Democratic People's Republic of Korea)」とある「渡航先」の記事に、なぜこの一国のみが書かれねばならないのか、と改めて疑問を感じ、日本との正常な関係にない隣国のことに胸を痛めた思いがよみがえるのである。近年の朝鮮仏教史の研究成果を語るにも、政治的な問題は大きく影を落としていることは間違いないであろう。

さて、朝鮮仏教史の通史を挙げるとすると、忽滑谷快天[1930]『朝鮮禅教史』(春秋社)があり、その成果は今日にいたるまで、先にいうように、古典としての価値は失われてはいない。また、本書の位置付けは禅宗思想の項を改めて述べる時にも再び述べるが、その内容は重要なので次に目次を掲げておくことにしよう。

第一編 教学伝来の代

概説

第一章 古朝鮮

第二章 三韓と三国の鼎立

第三章 海東仏教の起源

第四章 高句麗並びに百済の滅亡と仏教の盛衰

第五章 三国一統と新羅の教学

第六章 大賢の唯識、勝詮の華嚴

第二編 禅道蔚興の代

概説

第一章 海東禅道の濫觴

第二章 慧昭、恵哲、体澄、無染の禅風

第三章 梵日, 道允, 智誥, 行寂, 順之等の禅風

第三編 禅教並立の代

概説

第一章 高麗の太祖と諸禅師

第二章 教禅の隆昌と文教の勃興

第三章 鼎賢の瑜伽, 義天の台教, 李資玄の禅

第四章 学一, 坦然の禅風及び僧人の墮落

第五章 知訥が禅学の独創

第六章 了世の参禅, 高宗の刻蔵及び時代思想

第七章 承廻の楞嚴禅, 慧諶の禅門拈頌

第八章 天英, 冲止の興禅, 紹瓊の西来, 見明の博文

第九章 指空の禅機

第十章 復丘の利生, 普愚の接化

第十一章 惠勤の看話禅

第十二章 混修, 覺雲の宗風, 榮英の法灯

第四編 禅教衰頹の代

概説

第一章 李朝の初期に於ける禅教

第二章 排仏の氣勢と涵虚堂の玄風

第三章 世祖の興法と守眉, 智嚴等の門風

第四章 普雨, 一禅, 靈観

第五章 日本軍の侵入, 休静の活動

第六章 休静門下の龍象

第七章 靈奎, 敬軒, 印悟

第八章 善修, 覺性, 明照

第九章 白谷処能, 楓潭義諶, 其他の宗師

第十章 翠微守初と栢菴性聰の門流

第十一章 月潭雪霽, 霜峰淨源, 月渚道安, 喚醒志安, 晦菴定慧

第十二章 禅教混合, 北斗崇拜, 仏祖源流

第十三章 黙菴最訥, 蓮潭有一の博学鴻詞

第十四章 雪坡尚彦, 兎菴惠蔵, 華嶽知濯, 白坡亘璇

第十五章 草衣意恂, 優曇洪基

第十六章 混元世煥, 梵海覺岸, 雪寶有烟, 徐震河

第十七章 李朝の終末

忽滑谷が研究成果をまとめるに当たっては、すべては独創というものではない。権相老[1917]『朝鮮仏教略史』(京城新文館), 李能和[1918]『朝鮮仏教通史』2冊3巻(京城新文館・復刻版, 国書刊行会, 1974)および[1919]『朝鮮金石総覧』2巻(朝鮮総督府)や劉燕庭『海東金石苑』2巻([1976]亜細亜文化社影印)などに多くを依拠しながら, 全555頁, 索引22頁の大著として日本語としての通史の体系をまとめたのである。その記述の方法において, 基本となる歴史資料として, 重要な石刻資料を多量に使用している所に, その成果が今日まで優れたものとして評価されているのである。ただ, 原典資料の紹介の部分では, それを著者がいかに理解したかが不明なところも多く, 本書を踏まえた上でより具体的に研究を進めていかなければならない。つまり, 現代の若い研究者には, 著述の内容を理解するのが既に困難な箇所もあり, 資料提供として受け取る場合も出てくるであろう。それ故に今後は本書を踏まえて, 更に研究を前進させなければならない性格をもっていよう。

次に李朝時代に限定されるが, 成果として取り上げるべきものは, 高橋亨[1929]『李朝仏教』(宝文館・国書刊行会, 1973影印)である。高橋は李朝を3期に分け, 国初より成宗まで(1392~1494)を第1期, 燕山君より仁祖まで(1495~1649)を第2期, 孝宗より李太王まで(1650~1896)を第3期としている。第1期は, 国家公認の仏教とし, 教法は衰えることなく存続したとし, 第2期は教法も衰えず, 名僧も輩出し, 金や清軍の侵攻に対しても僧侶が義勇軍として勤労したとするも, 第3期には仏教の教勢は全く見るに足らざる状況になったと総括している。特に本書は儒教の盛んな李朝に対して, 仏教は振るわず, 国家より教化の手段を奪われた仏教の性格を明らかにしようとしたものである。内容は多彩にして, この時代の日本においては未知の資料を多く紹介した本文1062頁(15頁索引付)に及ぶ大著である。なお,

高橋は本書を朝鮮思想史体系の1部として発刊しており、全体を3部とし、「朝鮮之儒学」と「朝鮮之仏教」と「朝鮮特有宗教」に分け、「朝鮮之仏教」は更に「三国新羅高麗仏教」と「李朝仏教」の2篇に分けて出版を計画したが、本書は仏教のうちの後者のみの出版となったものである。本書もまた日本人の手になる代表的な朝鮮仏教史なので、次にその目次を掲げておくことにしよう。

朝鮮思想史体系緒言

李朝仏教序説

第1編 国初ノ仏教

第1章 太祖ト仏教

第2章 太宗及世宗ト仏教

第3章 世祖ト仏教

第4章 国初ヨリ世祖ニ至ル名僧

第5章 成宗朝ノ僧政

第6章 当時ノ士族ト仏教

第2編 李朝仏教第二期

第1章 燕山君ノ教政

第2章 李朝ノ僧科

第3章 中宗ノ僧政

第4章 明宗ノ僧政 附普雨

第5章 燕山君ヨリ明宗ニ至ル名僧

第6章 西山大師休静

第7章 西山ノ法類

第8章 浮休及其ノ嗣法

第9章 震黙一玉

第10章 宣祖・光海・仁祖ノ僧政

第11章 当時僧侶ノ生活

第12章 当時ノ儒者ト仏教

第3編 李朝仏教第三期

第1章 鞭羊門派

第2章 静観門派

第3章 碧巖門派

第4章 孝宗ヨリ正宗ニ至ル僧政

第5章 当時僧界ノ状況

第6章 梵唄源流

第7章 白坡大師ト禪ノ批判

第8章 正宗以後ノ僧政

第9章 純祖以後ノ僧侶ノ状態

第10章 円宗臨濟宗ノ宗論

第11章 最近朝鮮仏教ノ情况

第4編 李朝仏教余説

第1章 李朝ニ於ケル寺刹土田ノ変遷

第2章 李朝僧職ノ変遷

第3章 朝鮮僧侶ノ受戒

第4章 朝鮮寺刹ノ研究

なお、本書については、江田俊雄[1930]「『李朝仏教』を読む」(『宗教研究』新7-1)の簡単な紹介がある。

ただ、忽滑谷にしても高橋にしても、その集大成としての目的は、一応達成されているものの、日本統治時代(1910~1945)の成果であるために、その時代の制約を受け、その一部に不適切な表現があり、是正すべき一方的な見方も存在することは否めない。

戦後50年以上を経過して、新たな成果が期待されるのであるが、未だその成果は完成されていないと言ってよいであろう。現在、日本語で書かれ、入手が容易でしかも便利な朝鮮仏教史は、翻訳ものであるが、金煥泰著・沖本克己監訳[1985]『韓国仏教史』(禅文化研究所)がある。近年に翻訳された通史として簡にして要をえた入門の教科書の役割を果たすものである。原著は禹貞相・金煥泰共著[1968]『韓国仏教史』(ソウル信興出版社)であり、禹貞相の門下である金煥泰は、東国大学校で韓国仏教史を担当する韓国仏

教学界を代表する研究者である。本書は次の6章より成っている。

- 第1章 序説
- 第2章 三国時代
- 第3章 統一新羅時代
- 第4章 高麗時代
- 第5章 朝鮮時代
- 第6章 近代・現代(大韓時代以降)

以上のような状況を考える時に、独り開拓者として気を吐いているのが、鎌田茂雄である。鎌田が敗戦を機に仏教に導かれていく過程は、[1980]『観音の道 現在に生きる条件』(工作舎)に詳しいが、なぜ朝鮮仏教史を解明しようとしているか、今後の出版予定について簡潔に述べたものに、1988年3月23・25・30日の『中外日報』誌上に連載した「中国・朝鮮仏教研究と私」の3回の記事がある。この記事は東京大学東洋文化研究所教授を停年退職するに当たって、自己の研究史と今後の展望を概説したものである。近年の朝鮮仏教史の研究に大きな影響を与えた鎌田の研究は、特に専門とする華嚴学にとどまらず、[1980]『朝鮮仏教の寺と歴史』(大法輪閣)を著して啓蒙の役割を果たしており、鎌田茂雄とNHK取材班及び大村次郎の写真による[1991]『韓国古寺巡礼 新羅編・百済編』(日本放送出版協会)は、日本人に朝鮮仏教の現状を身近なものにさせた功績は大きい。それらの成果はもちろんのこと、鎌田がこのように朝鮮仏教史に改めて目を向けさせた意義は大きいものがある。現在、入手し易くその教科書の役割を果たしているのが、鎌田茂雄[1987]『朝鮮仏教史』(東大出版会)である。周知のごとく申賢淑[1989]『韓国仏教史』(民族社)として韓国語への翻訳がなされている。それ以前に著わされたのが、[1983]鎌田茂雄「朝鮮仏教史」(玉城康四郎編『仏教史Ⅱ』所収、山川出版社)であるが、その記述は極めて簡単である。

さて、誰もが朝鮮仏教史を学ぶ時に手にする鎌田[1987]の構成は次の5章より成っている。

- 第1章 古代三国の仏教
- 第2章 統一新羅の仏教
- 第3章 高麗の仏教
- 第4章 李朝の仏教
- 第5章 韓国の仏教

本書は更に詳細な『朝鮮仏教史』の出版への足がかりであるという。先に言う『中外日報』によると、なぜ、朝鮮仏教に目を向けたかについて、鎌田は一つの作業仮説を立てている。「それは中国の唐の儀礼は、日本の南都や高野山、比叡山などに伝承され、唐末から北宋にかけての儀礼は、韓国の仏教寺院に保存され、南宋のそれは日本の五山禪林に、明代以後のものは現在の中国大陸の寺院や香港、台湾、東南アジアの華人社会の中国寺院や日本の黄檗宗に伝承されているのではないか」と言うのである。鎌田は「中国仏教史の全体像を把握するには、教理、教団、儀礼、仏教美術全般にわたって注意を払いながら研究を進展させる必要がある。これからでもできる限り、他の分野の成果や、中国の学者の成果を吸収しながら、中国仏教の変遷の歴史を自分なりに理解したいと思っている」と述べるように、教理史のみに終始してきた従来の研究に対して、常に反省を加え、総合的な研究を目指そうというのである。それは朝鮮仏教史の研究についても同様の視点が必要である。「教団史の面では、今日の韓国仏教を理解する上で重要なのは李朝の仏教であり、さらに高麗仏教の理解が深められなければならない。高麗仏教を正確に把握するためには、中国の宋元仏教の研究が必要であり、チベット仏教の影響も無視することはできない」とあるように、教理史においてすら幅広い視野が要求されるであろう。更に韓国の仏教儀礼にしても、「中国の仏教儀礼との比較研究が今後に残された課題である」と言うのである。日本の研究者の成果にのみ基づく従来の研究も反省すべきことは当然であり、鎌田は「近年は韓国の仏教学の著述が次々に刊行されてきた。そのため、どうしても韓国学者の成果を積極的に摂取する必要がある。ハングル文献を解読し、その成果を批判的に摂取することなくして、朝鮮仏教史の研究は不可能になったといつてよい」とい

う指摘を忘れてはいないのである。鎌田が果たし、これから目指そうとする点に留意すると共に、その注意点は今後の朝鮮仏教史を解明していこうとする研究者が心がけねばならないことであろうし、鎌田によって見事に方向づけられていると言ってよいのではなかろうか。

ここに通史としての研究史を概観してきたが、更に詳細な分野ごとの研究史については、それぞれの成果報告を参照して頂きたい。本書の中には、成果として仏教美術史を含めて検討すべきかどうかが問題になったが、その全般に及ぶには担当者の関心の問題もあり、また、膨大な論文数を追加しなければならないので、最小限とすることにした。特に中吉功編[1973]『海東の仏教』(国書刊行会)は、通史の紹介の上において見落とすことのできない著書である。本書は三部より構成され、第一部の「海東の仏教」第二部の「海東仏教美術図彙」と第三部「海東仏教年契」より成っている。第一部は、権相老藁『朝鮮仏教史藁』を日本語に翻訳し、改名したもので、通史として便利な論である。分量は多くはないが、通史を概観するには、有意義な作であり、第二部は出版当時の写真も加えた仏教美術の解説で、第三部は仏教史年表となっている。その他、仏教美術史の分野においても、たとえば常盤大定・関野貞共著の『支那文化史蹟』(1939～1941)は、増補を伴って法蔵館より再刊され、[1975～1976]『中国文化史蹟』12巻・補遺1巻と「解説」2巻が刊行されて、中国仏教史蹟の貴重な報告として今日なおその価値を失っていない。その共著の一人である関野貞には、[1941]『朝鮮の建築と芸術』(関野貞博士記念事業会 編集代表伊東忠太編、岩波書店)があるが、これらの朝鮮仏教の美術史としての成果は今日なお価値があるといえよう。その他の主なものに、斉藤忠[1947]『朝鮮仏教美術史考』(宝雲舎)、中吉功[1971]『新羅・高麗の仏像』(二玄社)、金元龍[1976]『韓国美術史』(名著出版)、黄寿永[1978]『韓国仏像の研究』(同朋舎)、金元龍編[1986]『韓国美術1』(講談社)、秦弘燮編[1987]『韓国美術2』(講談社)、李東洲編[1987]『韓国美術3』(講談社)などがある。朝鮮仏教史の研究を今後進める上で、これらの美術史の成果を軽視すべきではなく、そのことは上述の鎌田が指摘した通りであることを、再度言及しておくことにしよう。

今後当然のこととして日朝交渉史の研究も盛んとなることであろうが、

ここでは、代表的な研究として田村円澄[1980]『古代朝鮮仏教と日本仏教』(吉川弘文館)と同[1985]『古代朝鮮と日本仏教』(講談社学術文庫)を載せておきたい。

なお、朝鮮仏教史の研究史についても、十分なものはなく、わずかに「戦後仏教史学の回顧と展望」の特集の中に、第二部の中国に牧田諦亮[1956]「朝鮮」(『仏教史学』5-3・4)が付設されているが、牧田自身が寓目せるものの紹介と断っている。その点では、後に禅思想の研究史で紹介する鄭性本(茂煥)[1994]「韓国の禅」(田中良昭編『禅学研究入門』所収、大東出版社)は、朝鮮の禅思想の研究を中心として執筆したものではあるが、従来全くなかった朝鮮仏教史の研究史の経過を補っていると言ってよい。

ただ、韓国仏教の資料目録と解題は、東国大学校仏教文化研究院編『韓国仏教撰述文献総録』(東国大学校出版部、1976)があり、日本語に翻訳されたのが『韓国仏書解題辞典』(国書刊行会、1982)であり、極めて便利な目録である。本特集を合わせて利用すればより便利になることを期待したい。

また近年の叢書の出版は慶賀にたえない。『高麗大藏經』の影印版の出版と共に、『韓国仏教全書』(全12冊)(東国大学校出版部)が1979年1月より1996年1月にかけて出版されたことは、今後の研究に大いに裨益するであろう。

イシイ シュウドウ
(駒沢大学仏教学部教授)